

歌と写真で綴る薩摩の脇道

— 歌三昧の史跡巡礼, その6-2 —

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志
 | 大海・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

西郷の生きた時代は、日本史上、屈指の激動の時代であった。

その震源は、江戸の玄関口、三浦半島の浦賀への黒船来航で、外国の脅威が現実の問題として迫って来たのである。

アヘン戦争での、イギリスによる清朝の敗北に於る南京条約、更には、アロー号事件および宣教師殺害事件を契機に勃発し、当時、交戦中だった清朝と、英・仏の連合軍とのアロー戦争（第2次アヘン戦争）という世界情勢に付け込まれ、アメリカに英・仏の脅威を煽られた、弱腰の徳川幕府は、それに乗せられた形で、天皇の勅許を得ずに、日米修好通商条約を締結するに至ったのである。

条約は、横浜小柴沖、あるいは神奈川沖の米艦ポーハタン号の艦上にて調印された。

1945（昭和20）年9月2日、第2次世界大戦の敗戦国・日本と連合国の間で、ポツダム宣言に則り、日本降服文書（休戦協定）が、東京湾上の米戦艦ミズーリ号の甲板で調印された。

ミズーリが停泊したのは、87年前の日本の屈辱を思い出させるかのように、不平等条約である日米修好通商条約が調印された時の、ポーハタン号と同じ位置であり、そこには、その時の旗艦旗が飾られていた、と歴史は語っている。

でも気にする事はない。そんな事を気にしたり、気付く日本人はほとんど誰もいないからである。歴史が繰り返すのに気付かないのだ。将来もそうだろう。

先の大戦では、多くの死者が出た。悲しみに耐えない。大いなる慰めは、占領者が米国であった事だろう。

ただ、いたずらにグローバル化した現代社会に於ては、日本に、そして日本人個人にいつ、何が起ってもおかしくはない。

昨日の友は今日の敵、今日の敵は明日の友、さて明後日は…。

昨日の勝利は今日の敗北、今日の敗北は明日の勝利、さて明後日は…。

幕末に於て注目すべきは、尊王（勤王）派であろうが、佐幕であろうが、はたまた開国派であろうが、攘夷派であろうが、皆が、外国の侵略を防ぎ、日本という国を守るために例外なく、死を賭して生き、実際、多くの人達が文字通り鮮血を流しながら、死んでいったのである。

皆、思いは同じだったろう。

・かくすればかくなるものと知りながら
やむにやまれぬ大和魂（松陰）

私達の記憶にある、ほんの一握りの人物の後ろに、その何百、何千倍もの名も無き平平凡凡の人達の死体の山が築かれた事を、決して忘れてはならない。やっと幸せをつかんだ、たそがれ清兵衛のように。

令和も5年になり、太平洋戦争後、既に、78年が経過し、その記憶も薄れてきた。

戦死者数約230万人、民間人死者数約80万人。

この人達が、現代の日本、日本人を見たらどのように思うだろうか？

私の個人的見解にすぎないが、両親のため、家族のため、祖国のためと信じながら、叫びながら死んでいった多くの同胞達は、

なぜこのような日本、日本人のために死ななければならなかったのかと、嘆いているに違いない。

現在までの長きに亘り、平和が続いた事は誠に喜ばしい。めでたい事である。

然し、政治、経済、社会いづれをみても、現時点では、将来に展望はほとんど見い出せない。

長い平和の中で、個人主義が浸透した事は、よかったが、反面自分の事以外に関心が払われなくなった。

通勤の車内に流れる曲の、本来の意味ではないが、「いいじゃないの今がよけりゃ」更には、「自分さえよけりゃ」と言う事になろうか。というより、他人の事や、日本の将来を憂う、心の余裕や物理的余裕が無いというのが実情だろう。

長州・萩の吉田松陰が現代に生きていたら、彼はどのような詩歌を読んだであろうか？彼も日本の未来に希望を持っていた。

317 萩こぼれ 戦後は已に霧の中
命を捨つる祖国は遙か

318 時ふりて 戦後は既に喜寿を迎え
身捨つる祖国は 歴史の彼方
めでたくもあり めでたくもなし

今こそ過去を 振り返れ
時の記憶の片隅を
後ろに智慧の山がある
捨てた命の山がある
未来に連なる懸け橋がある

日本の魂 蘇れ 大和魂 黄泉還れ
(松蔭風に、宗博)

さて、現在の日本を取り巻く世界情勢は、幕末、明治維新に匹敵していると言っても過言ではない。

1858(安政5)年、日米修好通商条約の締結のわずか1ヶ月後、島津斉彬は急逝。同年末、西郷は月照と入水。

条約締結から、4年後の1862(文久2)年、生麦事件が起り、翌63(文久3)年、公武合体、攘夷の薩摩と世界最強を誇る英艦隊が、戦闘を交える薩英戦争が勃発した。新しい日本の幕開けである。

この日に備え、薩摩藩は斉興の時代より、砲台の整備など行っていたが、その成果が、藩主・忠義とその父、国父・久光によって試される時が遂に到来したのである(薩英戦争に関しては、本誌第60巻 第9号参照)。

〔2〕幕末から明治維新の重要な歴史的背景 (6) 天皇、公卿の思想

今回は、主に薩摩藩主に言及した。彼らは、公武合体派であり、討幕派では決してなかった。それは、幕府との関係をみても明白である。

特に斉彬、久光は公武合体派の中心人物であった。



【図 206】孝明天皇

• 孝明天皇（第121代天皇）（図206）

明治天皇の父である孝明天皇は、1846（弘化3）年に16歳で即位した。

天皇の信念は、明確かつ終止一貫していた。

国政レベルに於ては、歴史と伝統を重んじ、121代も続いた日本の安寧が、自分の在位時代に外国に脅かされる事が、許せなかった。このような考えから、天皇は真底、攘夷思想の持ち主であった。

即位翌年には、賀茂神社、更に石清水八幡宮で外夷打ち払い、四海静謐を祈願するほどで、開国には断固反対であった。

石清水八幡宮は、応神天皇、比咩大君、神功皇后を御祭神とし、国家鎮護、弓矢・必勝の神社である。

国政同様に天皇のお膝元、京都にて騒動を起す過激攘夷派を嫌い、京都の治安維持を図る幕府の京都守護職の会津藩主で、新



【図207】京都守護職・松平容保

撰組を庇護した松平容保を信頼していた。

松平容保は類い稀な美貌の持ち主で、京都の女性には絶大な人気を誇っていた。彼の理念は会津家訓による皇室尊崇と、儒教の義・理に基づき、徳川宗家と命運を伴にするという精神に貫かれていた。

天皇の信頼の強さは、御料の緋（然える火のように明るい紅色）の御衣を賜うほどで、京都守護職時代にこれを仕立てた陣羽織姿はよく知られる（図207）。

一方、過激な尊王攘夷、倒幕運動で京都の治安を乱す長州藩には嫌悪感を抱き、1863年の文久3年の政変では、三条實実ら七人の攘夷派公卿と長州藩兵を京都から追放し、一橋慶喜、松平慶永らと公武合体を図った。

第1次、2次長州征伐（戦争）では、幕府に長州追討の勅命を発した。

無勅許の日米修好通商条約の調印には激怒したが、天皇自身が倒幕を望む事は決して無く、幕府の力で攘夷を実行しようとしたのである。

妹・和宮の將軍・家茂への降嫁（公武合体）に際しては、最終的に、将来の攘夷・鎖国を条件に勅許を決断した。

第15代將軍・慶喜の就任後、間もなくして、1867（慶応2）年、満35歳で崩御。

薩長による倒幕が現実味を帯びてきた時期でもあり、毒殺説もある。

• 將軍の御台所（正室）の条件

御台所の条件は、慣例により、以下の1～3番の内のいずれかである。

- 1番目：皇女、即ち天皇の娘（内親王）
- 2番目：世襲親王家の姫
- 3番目：摂家の姫

和宮は孝明天皇の異母妹であり、上記の条件に当てはまらない。

和宮は降嫁に際して、孝明天皇より内親王の宣下を受け、皇女（和宮親子内親王）となり、第14代將軍・家茂に降下した。

格式を重んじた当時、皇女和宮は將軍家茂より上位であり、家茂は和宮に相応の礼を尽くさなければならなかった。

●皇女和宮（後の静寛院宮）

和宮は孝明天皇の異母妹。前天皇の娘、実家は橋本家で母は、橋本経子（観行院）。

6歳の時、孝明天皇の命で、有栖川宮熾仁親王と婚約。

和宮は、都・京の公家社会で生まれ育ち、孝明天皇同様、外国嫌い・攘夷思想の持ち主で、粗野な関東の武士（それが、たとえ将軍であろうと）を嫌っていた。

無勅許での日米修好通商条約の調印による、倒幕運動の高まりの中、幕府は公武合体により政権維持を図ろうとした。

幕府は、天皇に和宮の将軍・家茂への降嫁を再三、奏請したが、天皇は和宮の熾仁親王との婚約、異母妹の和宮に無理強いはいできない、和宮自身が希望していない事を理由に、奏請を拒否。

和宮は、尼になっても異人達のいる関東にはゆかぬ、と断固拒否した。

然し最終的に天皇は、将来、幕府が通商条約の引き戻し（破約、鎖国）、攘夷を実行する事を条件に、降嫁を決断した。

和宮もいやいやながら、天皇と国民のために折れた。

熾仁親王も不本意ながら、実際上の婚約破棄を申し出、受理された。

●惜しまじな君と民とのためならば 身は武蔵野の露と消ゆとも（和宮）

1861（文久1年）、和宮一行は江戸をめざした。その行列は50km、3万人という前代未聞の規模であった。

江戸城内では、地方武家出身の姑・天璋院篤姫と、それとは逆に天皇家から降嫁した和宮、プライドの高い二人の間には、確執があった。

和宮の夫は、天璋院にとっては、義父・斉彬の希望した一橋家の慶喜ではなく、対立する紀伊の家茂であったので、若い和宮にとっては、非常に苦しい立場であったと

思われる。

結婚時、和宮と家茂は同年令の16歳。なお家茂は4歳で、御三家の紀伊藩主となり、13歳で将軍になった。

ただ和宮にとって最大の救いは、降嫁前には、あれほど嫌っていた関東武士、将軍・家茂の予想外の優しさであった。

家茂は天皇の内意により上洛などで江戸を離れたが、和宮はその度毎に夫の早期の江戸への無事帰還を祈願しているが、孝明天皇の命による長州征伐出兵に際し、1866（慶応2）年、大阪城にて死去した。

結婚後、わずか4年。弱冠21歳。

家茂の遺体と共に江戸城に帰ってきたのが、出発前に和宮が所望し、土産として家茂が買い求めていた西陣織（の布）であった。和宮は号泣した。そして布に和歌一首を添え、増上寺に奉納。それは、追善供養で袈裟に仕立てられた（空蟬の袈裟）。

●空蟬^{からおり}の唐織衣なにかせむ 綾も錦も君ありてこそ（和宮）

家茂の死後、第15代将軍に慶喜が就任。

兄の孝明天皇も同年、崩御した。

和宮は、完全に徳川の女性となり、官軍の江戸総攻撃を前に、徳川家存続の歎願書を、官軍宛にしたため、更に一橋茂徳、田安慶頼の嘆願書を、茂徳が大総督熾仁親王に持参する事になった時、和宮は、橋本実染に會ての許嫁・熾仁親王に直接みてもらえるように依頼した。

和宮は、1877（明治10）年9月2日、31歳で死去。（西郷の死は9月24日）

和宮の遺言で、葬儀は神式ではなく、徳川家に則り仏式で行われ、増上寺の徳川家墓所に葬られた。

墓所には、家茂と和宮の宝塔が並んで建てられている。

●有栖川宮熾仁親王（図208）

孝明天皇より、熾仁の名を賜り、親王宣下を受け、近衛忠熙の加冠により元服。

17歳の時、和宮と婚約。

その後、和宮の降嫁前に婚約延期（辞退、事実上の婚約破棄）が受理された。

親王は、毛利家の長州藩と縁戚にあり、朝廷内では、三条實美らと共に、自他共に許す急進的な長州系の尊王攘夷派の急先鋒であった。

1863（文久3）年の薩摩、会津藩などによる8月18日の政変で、長州藩は京都から追放された。

1864（元治1）年、長州藩が巻き返しを図り、容保らの追放を企てた蛤御門の変（禁門の変）で、熾仁親王は長州側に加担。

結局、京都の3万戸が焼失した内乱は、長州側が敗北し、長州は朝敵となった。

この変以後、西郷隆盛が頭角を現してくる。

親王は、長州嫌いの孝明天皇の怒りを買って、謹慎・蟄居を命ぜられる。

この後、情勢は急転回する。

1866（慶応2）年、薩長同盟締結。

長州征伐中の将軍・家茂が大阪城で死去。

一橋慶喜、15代将軍就任。

孝明天皇崩御。

1867（慶応3）年、明治天皇が即位すると、孝明天皇の怒りを買っていた親王や公卿が復帰。熾仁親王も謹慎を解かれた。

明治天皇の親王への信頼は厚く、親長州派の親王は、大政奉還後の王政復古の大号令による新政府樹立に際し、最高職の総裁に就任。

1868（慶応4）年、戊辰戦争が勃発すると、新政府軍の最高司令官である東征大総督、会津征討大総督に就任。

この時、西郷は東征大総督下参謀に就任。官軍は、東海道を下り進軍し、4月11日江戸城は開城された。

1870（明治3）年、熾仁親王は、旧水戸藩主・徳川斉昭の娘で、将軍であった徳川慶喜の妹・徳川貞子と結婚する。

この事は、熾仁親王の徳川家、慶喜、江戸を含む日本に対する思い、天皇制に対す

る思いが秘められている、重大なキーポイントであり（私見）、後に詳述する。

1877（明治10）年の西南戦争では、親王は、鹿児島逆従征討総督に就任し、かつての部下の初代陸軍大将の西郷と戦う事になる。運命のいたずらという他はない。

西南戦争後、親王は第2代目陸軍大将。

• 陸軍大将に関して

旧日本陸海軍に於ては、1869（明治2）年に兵部省が設置された際、陸・海軍大将が設けられた。

初代は西郷隆盛（明治6年）、2代は有栖川熾仁親王（明治10年）、3代は山縣有朋（明治23年）である。明治前半期に大将になれたのは極めて限られた人であった。

1889（明治22）年、大日本帝国憲法発布に伴う大赦で、西郷の汚名が解かれ、9年後



【図 208】有栖川宮熾仁親王

に西郷像が、上野公園に建てられた。

1898 (明治 31) 年、除幕式が行なわれたが、その時、現われた像は衆知の、西郷の親しみ易さを表現した、愛犬ツンを連れ、兎狩りに行く浴衣姿であった (高村光雲作)。

除幕式に出席し、それを見た妻イトは「宿^{やど}んしは、こげんなお人じゃなかったこてえ」とつぶやき、隣にいた従道が、足をつついて黙らせたと言われる。

西郷は、大将に誇りを持っていた。

イトの理想とした夫の、陸軍大将の軍服姿で直立不動の銅像は、郷土の安藤昭により、1937 (昭和 12) 年に建てられた。

また、溝辺町鹿兒島空港前の西郷公園には、羽織・袴姿の 10.5 米の大きな像が建っている。

• 近衛忠熙^{ただひろ} (図 209)

忠熙は、公卿、五摂家筆頭の近衛家・第



【図 209】近衛忠熙

25 代当主であり、妻は島津斉興の養女・郁姫である。

忠熙は孝明天皇の養育係をつとめ、攘夷派、公武合体派として活動した。

1856 (安政 3) 年、公武合体派の島津斉彬の養女・篤姫が、将軍・家定に嫁すに当り、御台所の条件を満たすため、忠熙の養女となった事は、当然の成り行きであった。

また忠熙は攘夷派であり、将軍継承問題では一橋派で、同じ思想の久邇宮朝彦親王 (青蓮院宮、尊融入道親王) らと清水寺に出入りして、情報交換を行っていた。

この清水寺成就院の住職が、一橋派・尊王攘夷主義の活動家、僧・月照である。

斉彬、篤姫、忠熙の連がりに西郷が係わる事になるのである。

将軍継承問題で一橋派の忠熙は、1858 ~ 59 (安政 5 ~ 6) 年の安政の大獄により、謹慎処分を受け、失脚する事となる。

月照や西郷にも、大獄の波が襲いかかってくるのである。

幕末から明治維新にかけては、以何にして外国の侵略から日本を守るかについて、将軍、大名のみならず、天皇、公卿まで、皆、命を賭けて、血を流しながら、己の信ずる道を突き進んだのである。

彼らの面構えから、心の奥底に秘めた信念が感じ取れる。

全ては、たった 4 隻の黒船来航から始った。

・泰平の眠りをさます上喜撰
たった四杯で夜も寝むれず

〔3〕西郷の生い立ち

西郷 (1829 ~ 77, 文政 10 ~ 明治 10) は、鹿兒島城下、甲突川沿いの下加治屋町に、家格の低い御小姓^{ぐみ}与の武士の子として生まれた。

この地は、西郷の時代およびその後の日本を牽引した多くの人材を輩出した。

西郷隆盛、西郷従道、吉井友実、井上良馨、村田新八、篠原国幹、黒田清隆、山本権兵衛、東郷平八郎、伊地知正治、大山巖、大久保利通……らである (図 210)。



【図 210】甲突川周辺の偉人誕生地（鹿児島市観光案内図）

彼らは皆、同じような家格と家庭環境のもと、薩摩独特の郷中教育を受けて育った。

郷中とは数十戸を単位とする、武家屋敷の地域区割の事である。

この区割内の6～24歳の男子を稚児、二才、兄に分け、年長のリーダー（二才頭と呼ぶ）が二才の指導を行った。内容は、儒学、習字、算術、武術などであっ

た。

郷中教育の理念は、年長者に絶対服従で、助け合い、守り合い、鍛え合い、うそを言わず、弱い者いじめをしない、負けるな、というものであった。

これらを通じ、主君に対する忠、親に対する孝、武術を通じ徳を尊ぶ事（尚武）を身に付けるのである。

5つの年中行事もあった。いずれも儒教精神に基き、先人の徳を忍び、精神力、根性、体力を養った。

・曾我どんの傘焼

曾我兄弟の孝行心、忠孝の道（図 211）。

・加世田詣り

島津日新公の遺徳を偲ぶ。日新寺（現、竹田神社）を詣でて慰霊。

・心岳寺詣り

秀吉の九州征伐で降服せず、最後まで抵抗し自害した島津歳久を偲び、その地に創建された心岳寺（現、平松神社）



【図 211】曾我どんの傘焼（かごしま市観光ナビ）



【図 212】西郷隆盛誕生地の全景



【図 213】西郷隆盛誕生の地の碑



【図 214】西郷従道邸庭園跡庭石

に詣でて慰霊。

・妙円寺詣り

関ヶ原の戦いで、中央突破で薩摩に帰還した島津義弘の苦難を偲ぶ。義弘を祀る妙円寺（現、徳重神社）を参詣。

・赤穂義士伝輪読会

赤穂義士討入りの12月14日夜、武士の忠心の模範としての義士伝の輪読を、夜を通して行う。

甲突川べりを歩くと、閑静な地に大きい木に囲まれた、西郷隆盛誕生の地がある。図212で、中央右寄りに大きい石碑があり、その向うが甲突川。図213は、碑の拡大。更にその向うに、西郷従道の東京の邸宅の庭石が、記念に移築されている（図214）。

なお図215は、妻イトが描いていた尊敬する夫・隆盛の堂々たる陸軍大将の軍服姿である（右手に軍帽、左手に軍刀）。



【図 215】第1代陸軍大将・西郷像
銅像下に東郷平八郎書の銘あり

前回の医報で誤りがありました。以下の句のように訂正させていただきます。

316 風誘ふ 草の露かな 秋の谷

（つづく）